

陶器生産技術からみた濟州と琉球

池田 榮 史
(琉球大學 教授)

1. はじめに

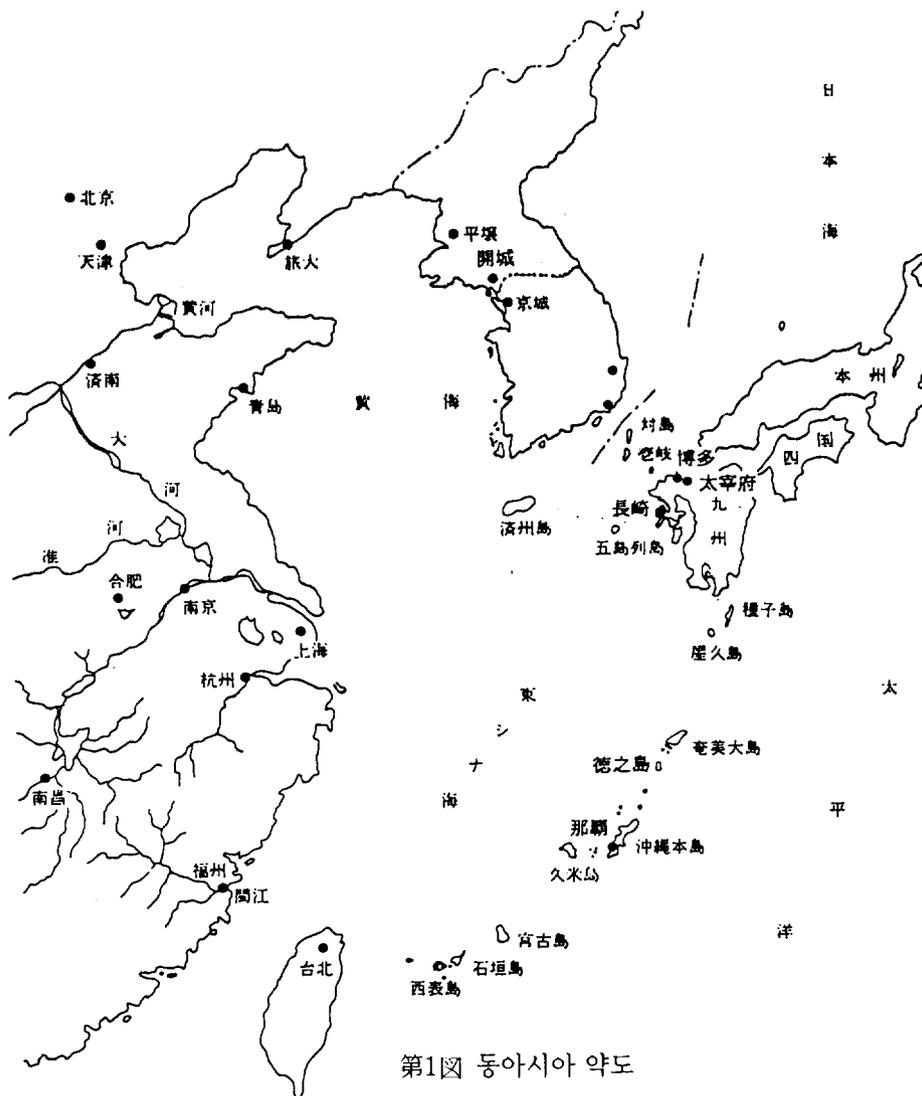
古代の日本には須恵器という青灰色を呈する硬質陶器が存在する。須恵器の源流は原三國～三國時代の韓半島で生産された陶質土器に求められる(註1)。須恵器の製作技術は古墳時代であった5世紀代に伝えられ、以後10世紀頃まで、日本における祭器や食器をはじめとする日常容器として広く用いられた。さらに、その技術伝統は一部の中世陶器へ引き継がれ、日本各地の須恵器窯系中世陶器として、その命脈を保ったことも良く知られている(註2)。

さて、現在では日本に含まれる琉球列島は、17世紀まで社会的にも文化的にも、日本本土とは全く異なる世界を形成していた。したがって、陶器生産などの点からすれば、琉球列島と日本の古代・中世の関係は、極めて希薄なものと従来考えられてきた。しかしながら、最近の考古学的調査によれば、中世段階の琉球列島において、須恵器の系譜を引くと考えられる硬質陶器が、極めて大規模に生産されていたことが明らかとなりつつある。そればかりか、この硬質陶器は日本本土の須恵器ではなく、高麗時代の無釉陶器との類似も指摘され、高麗時代の韓半島と琉球列島との関係を視野に入れることが必要となりつつある(第1図)。

この韓半島と琉球列島間の物質文化の上での関係に強い関心を持つ筆者は、その関心の枠組みについて、先年、本誌においてその概略を述べさせていただいた(註3)。本論はこれに続くものであり、ここでは高麗王朝時代に並行する段階の琉球列島で出土する硬質陶器に焦点を絞り、高麗時代の韓半島および濟州島と琉球列島との研究交流の可能性について、ささやかな問題を提起することとしたい。

2. 研究の歩み

琉球列島において、日本本土の須恵器に似た硬質陶器を焼成した窯跡群が発見され、調査が行われたのは、1984(昭和59)年のことである。琉球列島のやや東北寄りに位置する徳之島伊仙町の山中において、溜池等整備事業が計画され、その掘削工事に際して、地元研究者が窯跡を発見したことが契機となった。そして、発見後の同年10月から翌年3月にかけて、一部の確認および本調査が実施されている(註4)。本窯跡発見以前においても、日本本土で出土する須恵器に似た硬質陶器が、琉球列島各地から出土することは既に知られており、これらについては、日本本土と同じ「須恵器」(註5)、あるいは「南島の須恵器」(註6)の名称で呼ばれていた。1955～57年にかけて行われた九



第1図 동아시아 약도

学会連合奄美大島共同調査委員会による報告書において、国分直一・河口貞徳氏らはこの種の硬質陶器の存在に注目し、これらは九州の南辺で製作され、日本古代国家の南島経営の開始の事情と関係して、南下・広布したものと推測されている(註7)。

これに対して、1960年代に入ると、勝連城(註8)やヒニ城(註9)など、沖縄本島を中心としたグスクの発掘が行われ、これらの硬質陶器が多く出土することが知られるようになる。その結果、これらは日本本土から搬入されたのではなく、琉球列島内で生産された可能性が考慮されはじめる。その中で、これらの硬質陶器が本土(主として南九州)の須恵器にほとんど類例を見ないことを強く指摘したのは、三島格氏である(註10)。三

陶器生産技術からみた濟州と琉球

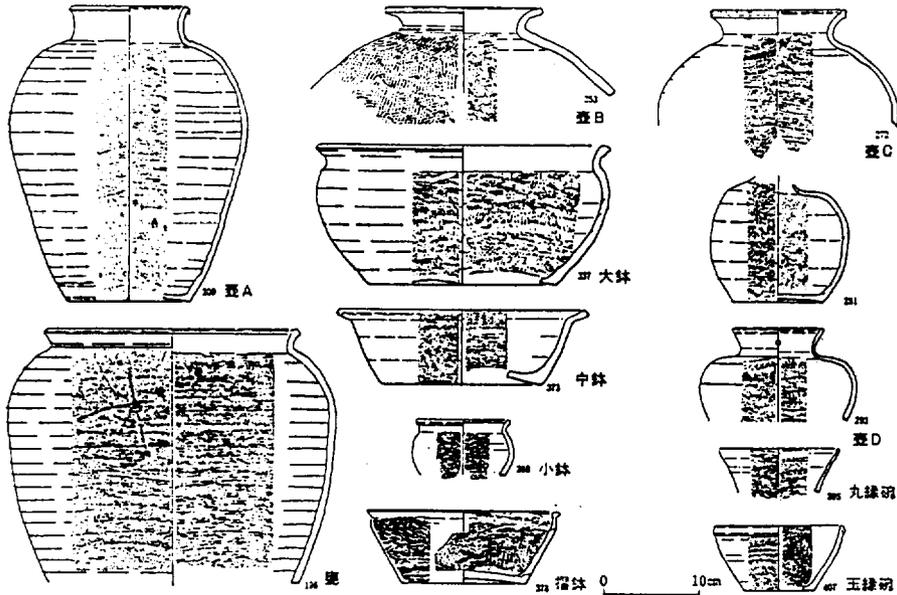
島氏の論考は1966年に出されたものであり、琉球列島出土硬質陶器の特徴を踏まえつつ、窯跡が当時の琉球列島内で発見されていないことを前提として、韓半島からの将来品である可能性を指摘されている。

このような研究状況に大きな画期をもたらしたのは、1970年に発表された佐藤伸二氏の論考である(註11)。佐藤氏は奄美諸島出土の須恵器に似た硬質陶器を「南島の須恵器」と呼び、壺の施文方法を中心として4式に分類した上で、これを手掛かりに沖縄の城時代発展過程を三期に区分された。そして、奄美から沖縄にかけて出土する「南島の須恵器」は一連の変化として理解でき、その焼成地が沖縄を含む琉球列島のどこかにあったと結論付けられた。佐藤氏は須恵器焼成技術の南伝は、日本の奈良・平安期に本格化する大和政権の南島経営に関係し、これがまず南島北部域に定着し、次いで南島的に変質しながら南下したものの、あるいは遣唐使とともに伝わったものとされている。佐藤氏による論考は、琉球列島出土の須恵器に似た硬質陶器について型式分類と編年を試みたこと、またこれを踏まえた上で、その生産地を沖縄を含む南島内に求められた点において、従来の研究を大きく前進させることとなった。

これに対して、これら琉球列島で出土する硬質陶器に「類須恵器」の名称を付されたのは、白木原和美氏である。1971年および1975年に発表された論考(註12)において、白木原氏は日本の古墳文化の地理的・時間的拡がりに基づいて生産される本土の須恵器と、琉球列島出土の須恵器に似た硬質陶器とは、その歴史的・文化的位置付けが本質的に異なることを指摘した。そして、両者の関係が明確とならない限りにおいて、これを簡単に須恵器と呼ぶべきではないとされた。白木原氏自身は類須恵器の源流と産地を韓半島の陶質土器に求められており、氏の命名と問題提起以降、「類須恵器」の名称が一般に用いられることとなる。

これらに続き、1975年には安里進氏によって、類須恵器をⅠ・Ⅱ類に分ける考え方が提起された(註13)。安里氏は佐藤氏による分類と年代的位置付けを大筋において踏襲しつつ、壺の口縁部形態と作りの精粗を基にした分類と編年を試みたものである。ただし、類須恵器の源流については言及されていない。また、安里氏はカムイヤキ窯跡群発見後の1987年・1991年、先の分類を発展させ、壺を対象として、口縁部形態や頸部の屈曲度合、調整技法の精粗などによって、類須恵器を4式に分類・編年する考えを提示されている(註14)。

1984年のカムイヤキ窯の発見と調査は、このような研究状況の中での出来事であり、大きな関心を呼ぶこととなった。窯跡は2支群からなり、第Ⅰ支群7基(うち1基は灰原のみ)、第Ⅱ支群7基、計14基が確認され、この中の第Ⅰ支群7基と第Ⅱ支群1基が調査されている。その結果、類須恵器には、従来、その特徴とされていた波状や平行沈線文を施した壺だけでなく、壺や鉢・碗・注口製品などもあり、さらに壺と鉢はそれぞれ4種、碗は2種に分けられることが明らかとなった(第2図)。また、第Ⅰ支群2・3号窯と第Ⅱ支群4・5・6号窯で熱残留磁気年代測定、第Ⅰ支群1号窯と第Ⅱ支群3・6号窯で放射性炭素年代測定が行われた結果、前者では12世紀中頃～13世紀前半、後者ではそれぞれ1050±45Y.BP、1140±55Y.BP、1210±130Y.BPの年代が得られている。しかしながら、各窯跡や灰原での器種組成の違い、さらには器形や製作技法などに

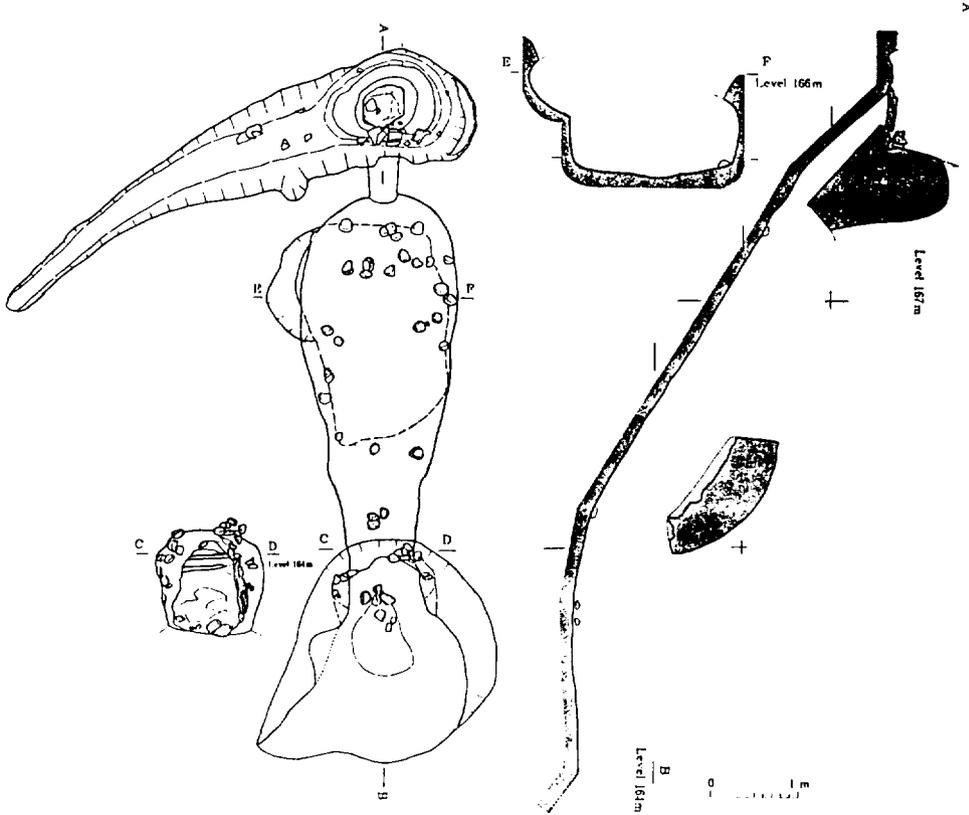


第2図 德之島 카미야키窯, 출토 類須惠器의 基種分類
(註4의 문헌에서 인용, 작성)

よる年代的變化を導き出すまでには至っていない。ただし、長さが短く、平面形が無花果状を呈する窯の構造については、11~12世紀と考えられる熊本県球磨郡錦町下り山窯跡群との類似が指摘され、壺・甕・鉢を主体とする器種構成の在り方を含めて、日本中世陶器との類似が強く意識されることとなった(第3図)。なお、カムイヤキ窯跡群については、その後1996年より分布確認調査が進められており、1999年夏の段階で、IX支群までの分布の拡がり確認されている(註15)。

ところで、このカムイヤキ窯跡群の発見と調査は、類須惠器研究に日本本土の中世陶器との類似を比較するという方向性を示すこととなったが、1991年には赤司善彦氏によって、これに一石を投じるような資料が紹介された。それは太宰府や鴻臚館から出土する高麗産無釉陶器の存在である(註16)。赤司氏は太宰府や鴻臚館から高麗産無釉陶器が出土することについての注意を喚起するとともに、これと類須惠器との類似にも強い関心を向けられた。このため、日本本土中世陶器との関係の解明に収束しようとしていた類須惠器研究に、再び、韓半島との関係を考慮する気運が高まることとなった。しかしながら、類須惠器は韓半島や日本本土から遠く離れた琉球列島で出土することから、韓国や日本本土の研究者の関心を引くことが少なく、高麗王朝をはじめとして、統一新羅王朝や朝鮮王朝に見られる無釉陶器との関係について、詳しく検討するまでには至っていない。

陶器生産技術からみた濟州と琉球



第3図 카뭉야키窯, 第 I 支群 第1号窯, 실측도
(註4 문헌에서 인용, 일부변경)

3、類須恵器研究の現状

さて、このような状況にある研究を進めるためには、まずは比較資料の基本となる類須恵器の実態を把握することが重要である。これには類須恵器の生産遺跡と消費遺跡双方の検討から進めなければならない。生産遺跡については、徳之島カムイヤキ窯跡群について、地元伊仙町教育委員会による確認調査が進められており、その成果に期待される部分が多い。次に、消費遺跡の分布とその内容の把握については、琉球列島に分布する各出土遺跡資料の確認を確実に進めて行くしかない。なお、これら2つの課題に取り組むについては、窯跡出土資料であれ、消費遺跡出土資料であれ、器種やその形態の変化、および器種の組み合わせなど、これまで知られている資料についての型式学的検討を進めておくことが必要である。

そこで、これまでの類須恵器を対象とした型式学的研究を振り返れば、その手始めとなった佐藤氏は壺の施文技法を手掛かりとして、A、Bに2分類し、さらにA類をAⅠ、AⅡ、AⅢに3分されていた。Aは頸部から肩部にかけて、回転を利用した波状文と平

行沈線が施されるもので、Bはこれが波状文のみとなるものである。AⅠ、AⅡ、AⅢは波状文と平行沈線の施し方に違いがあり、AⅠ式は波状文や平行沈線を一周ずつ丁寧に描くのに対して、AⅡ、AⅢ式は波状文・平行沈線を渦巻状に施す。また、この場合、AⅡ式では平行沈線と波状文が重なることなく、整然と施されるのに対して、AⅢ式では平行沈線を波状文が切って、やや粗雑に施される。佐藤氏はこれらの違いを時間的推移の反映とし、施文が丁寧なAⅠ式からAⅡ、AⅢ式を経て、平行沈線が省略されたB式へ変化したと考えられている。そして、AⅠ式からB式への変化過程では、口縁部の作りの粗雑化や叩き締め技術の退化も認められることを指摘している。その上で、佐藤氏はこれらの年代について、日本本土では平安末期～鎌倉初期を中心として用いられる滑石製石鍋が、AⅡ式以降の須恵器と伴うことを踏まえて、その上限を12世紀後半代に位置付け、これに先行するAⅠ式については明言されていないものの8世紀に近い段階、衰退については13世紀後半から14世紀代を想定されている(註17)。

一方、安里氏の類須恵器を4分類する考え方では、大・中型壺の口縁部形態の変化を中心に、頸部の屈曲度、肩部の張り具合などを考慮して、Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳ式古、Ⅳ式新に分類される。それぞれの分類概念を要約すると、次の通りである。

- Ⅰ式 口縁端部は丸く、その下に突帯がつく
頸部は強く外方に曲がり、肩部はなで肩で、ほとんど無文である
- Ⅱ式 突帯の位置が口縁部に接近し、肥厚した口縁となる
(突帯の形状が残り、肥厚部端面下端が突出し、その上面には凹面がある)
頸部の屈曲はまだ強く、波状沈線が施される
- Ⅲ式 突帯の形跡を失った肥厚口縁で、肥厚口縁端部は平坦ないし凸面となる
頸部の屈曲は弱くなり、肩部の張りが強くなり始める
- Ⅳ式古 口縁端部の肥厚は失われて単純化する
口縁端部は丸くおさまるか平坦で、平坦の場合は内傾、水平、外傾がある
頸部は直立気味に立ち上がり、肩の張りは強い
退化した波状沈線が施されるか、無文となる
叩き締めは弱く厚手となり、内面の粘土継ぎ目が消去されずに残る

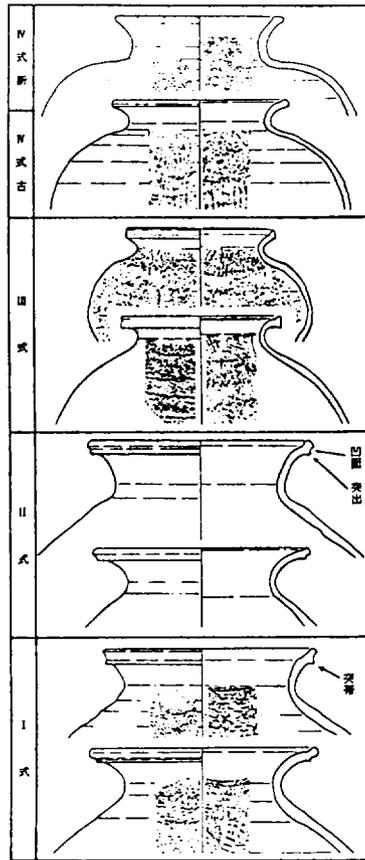
Ⅳ式新 Ⅳ式古に比較して、頸部の屈曲が弱く、口縁部端面が外傾しない

安里氏分類のⅡ式は佐藤氏分類のA式、Ⅲ式はB式、Ⅳ式は波状沈線が萎縮したB式に相当する(第4図)。これらの年代的な位置付けについて、安里氏は土器や滑石製石鍋などの伴出遺物との組み合わせも踏まえながら、Ⅰ式に11世紀、Ⅱ～Ⅲ式に12世紀、Ⅳ式古に13世紀前半、Ⅳ式新に13世紀後半～14世紀前半の年代観をあてている。その上で、各型式が消費遺跡だけでなく、カムイヤキ窯跡でも併存しながら変遷することを指摘し、機械的な型式編年から伴存期間を考慮した型式変遷を明らかにする必要性に言及されている(註18)。

4、類須恵器の製作技法

さて、佐藤・安里両氏の分類と編年は壺を対象としており、その他の器種は扱われていない。これは消費遺跡、カムイヤキ窯跡ともに、壺の出土例が多いことに起因するが、

陶器生産技術からみた濟州と琉球



第4図 安里進氏에 의한 類須恵器 분류편년안 (註14문헌 <1991>에서 인용)

このままでは口縁部周辺を残す壺以外の資料では、類須恵器の分類・編年を含めた検討ができないこととなる。そこで、再度、生産遺跡であるカムイヤキ窯跡群の出土資料を確認すれば、先述したように、壺はA、B、C、Dの4類、鉢は大鉢、鉢型、小鉢、摺鉢の4類、碗は丸縁と玉縁の2類があり、これに甕や注口製品などが見られた(註19)。

さらに、製作技法についても、これまでの研究では叩きなどの一部の技法が検討の対象とされており、底部作りから粘土紐(帯)巻上げによる成形、叩き・押さえ・ナデ・削りによる整形など、一連の製作過程の復元を含む検討はなされていなかった。日本の須恵器や中世陶器の研究では、このような製作工程や製作技術についての分析を含めた型式学的研究を一般に行っており、琉球列島から出土する須恵器についても、これに習うべきと考えられる。

そこで、類須恵器の製作技法をこれまでに筆者が実見した範囲で復元してみれば、甕・壺・鉢を主とする製品には共通した製作過程と技法が観察される。すなわち、その製作に当たっては、まず轆轤(回転台)の上に粘土塊を置き、これを叩き延ばして薄い粘土

板を作り、その上で回転を利用して丸い底部を作り出す。次に作り出した底部の周縁部に粘土紐を巻き上げて、胴部を作り上げる。この際、粘土紐の接合は指で行い、その後で器内面に押圧具を置き、器外面からは打圧具を使って、叩き締める。最後に轆轤回転を利用して、底部から胴部にかけての内面に筥状もしくは板状工具による粗い撫で調整を施すことによって、叩きの際の押圧具痕を消す。胴部外面については撫で調整が行われるものの、打圧痕を残す場合が多い。胴部成形後、その上端に粘土紐を手で追加接合し、口縁部を作り出す。口縁部はやはり轆轤回転を利用した撫で調整が行われ、底部と胴部の接合部分についても、やや厚めに作られた器壁を轆轤回転を利用した筥削りによって、薄く仕上げる。口縁部を除いては、全体の仕上げが粗く、粘土紐の接合痕や叩き成形痕、轆轤回転を利用した整形痕が明瞭に観察される点に特徴が認められる。また、底部の厚さは法量に係わらず3～5mmのものが多く、器壁も基本的に薄い。焼成は硬く焼き締められ、黒味がかった青灰色を呈するものがほとんどである。

これらの製作技法の中には日本の中世陶器との共通性も見られるが、底部や胴部を薄く仕上げる技法や、胴部粘土紐の巻き上げ痕と叩きや撫で調整痕が明瞭に観察できる点などについては、明らかな個性を示している。この個性の中で、胴部を薄く仕上げることや粘土紐の巻き上げ痕および仕上げの撫で調整痕が明瞭に観察される点などは、赤司氏が太宰府や鴻臚館出土の高麗産無釉陶器の観察の際に指摘された特徴と共通する(註20)。筆者も太宰府や鴻臚館で出土した高麗産無釉陶器資料と、琉球列島で出土した類須恵器資料を同時に並べて観察する機会を持ったが、資料の中にはその識別に悩むほど、類似する資料も認められ、両者を詳細に比較検討する必要性を痛切に感じざるを得なかった。この点において、韓国の研究者の類須恵器に対する関心が高まることを願っている。

なお、近年の須恵器研究では蛍光X線分析法などによって、生産地を科学的に特定する作業も進められており(註21)、カムイヤキ窯跡群の群毎の資料や消費遺跡出土資料にも、これらの科学的方法を適用することも必要であろう。

5. まとめ—類須恵器研究と済州島—

以上、簡単に琉球列島に見られる類須恵器という硬質陶器について、現在の研究状況を紹介した。これらの硬質陶器の生産は少なくとも11世紀には開始され、14世紀までは存続していたと考えられる。およそ300年にも及ぶその歩みには圧倒される思いを禁じえないが、その生産には、土作りから器の製作、窯の築造、燃料の確保、製品焼成までの熟練した技術が必要であることはいうまでもない。この点において、現在までの考古学的調査成果を踏まえた11世紀頃の琉球列島の社会的・文化的状況からすれば、徳之島における類須恵器製作技術の自生的成立は考え難く、島外からの技術導入を考えざるを得ない。これについては既に述べてきた通り、器種構成の類似からは日本の中世陶器、製作技術や形態の類似からは高麗産無釉陶器を主とする韓半島製陶技術との関係が想起されるところである。類須恵器の型式学的研究が確立していない現状で、これらの是非を簡単に云々することはできないが、重要なことは11世紀段階の徳之島で類須恵器が生産されている点にある。すなわち、類須恵器の生産にあたっては、製作技術を持った集団が徳之島へ移動しなければならず、そこにはこれを企画・実行する人間の集団や組織

陶器生産技術からみた濟州と琉球

の存在が想起されるのである。このことは類須恵器の琉球列島全域に及ぶ分布にも係わることで、これにも類須恵器を運ぶ海運・航海技術と集配体制を持った集団や組織の存在が不可欠である。

では、この類須恵器の生産と流通を担ったのは、どのような集団・組織なのであろうか。これには当時の琉球列島内にその存在を求める考え方と、外部からの働きかけを評価する考え方がある(註22)。この場合、琉球列島内での集団や組織の存在を重視すれば、農耕の導入などに伴って、琉球列島における陶器への需要が高まり、技術導入を図ったことが考えられる。また、外部からの働きかけに重きを置けば、類須恵器の分布域である琉球列島を念頭において、徳之島にカムイヤキ窯を構築し、その流通を取り仕切った集団や組織が存在することとなる。現在のところ、どちらとも決しかねるが、琉球列島から九州、場合によっては韓半島までを視座に入れた活動を行う集団・組織が、11世紀段階に存在したことは確実である。

韓半島と琉球列島との交流をめぐるこれまでの研究によって、韓半島三国時代の古墳からは、琉球列島で採取される大型の貝を用いて作った馬具や貝匙などが出土することが知られている。また、朝鮮王朝代の文献には琉球の王族が亡命した記録や、漂着した朝鮮漁民が琉球国から送還された記事なども残されている(註23)。これに対して、琉球列島では高麗瓦と呼ばれる韓半島の造瓦技術で作られたと考えられる瓦類や高麗青磁が、14～16世紀代の遺跡から出土するのをはじめ、高麗版大藏経を納めた建造物の伝承が残るなど、高麗王朝以降の韓半島との関係を示す資料が多く認められる(註24)。これらのことからすれば、韓半島と琉球列島との関係は文献記録が現れる14世紀代以降だけではなく、それ以前の段階から存在していたことが明らかである。その関係がどのような内容・実態をもつものかを検証する上で、琉球列島に見られる類須恵器は一つの手掛かりを示すものと考えられる。

しかしながら、類須恵器の比較対象となる高麗産無釉陶器やこれに続く朝鮮王朝期の無釉陶器についての研究は韓国内において、それほど活発ではないように思われる。先年の拙稿において既に指摘したが、その点において、濟州島は三別抄による蒙古抵抗活動や元王朝による濟州牧の設置など、高麗王朝時代を通じた歴史変動の舞台となったことから、これに係わって相対的・絶対的年代の明らかな遺跡や遺物を限定できる可能性が高いものと考えられる。とすれば、濟州島での高麗王朝時代についての考古学的研究、特に日常容器としての無釉陶器研究が進むことが、琉球列島の歴史展開を探る上において、大きな影響力を持つことが明らかである。琉球列島の歴史研究にとって、濟州島における考古学研究の動向からは目が離せない理由がここにあるのである。

謝辞

本文を執筆するにあたり、濟州大学校耽羅文化研究所長高昌錫教授、濟州大学校博物館長灰鏡仁教授、および同博物館学芸研究員康昌和先生、また濟州大学校人文大学助教授金東桢先生の御教示・御高配をいただいた。

また、本文の韓国語訳については、濟州大学校卒業生で、現在琉球大学大学院人文社会科学科院生呉盛奎君の手を煩わせた。

記して、感謝の意を表します。

註

- 1、樋口隆康「須恵器」『世界陶磁全集』1—日本古代 1958年などを参照
- 2、楳崎彰一「古代・中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学』VI歴史時代④1967年などを参照
- 3、拙稿「物質文化資料からみた韓国済州島と琉球列島の交流」『耽羅文化』第19号 1998年
- 4、伊仙町教育委員会「カムイヤキ窯古窯跡群Ⅰ・Ⅱ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)・(5) 1985年
- 5、九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美—自然と文化—論文編 1959など
- 6、佐藤伸二「南島の須恵器」『東洋文化』48・49 1970
- 7、註5文献 P. 244
- 8、琉球政府文化財保護委員会「勝連城跡第一次発掘調査概要」『琉球文化財調査報告書』1965年度、および同「勝連城第二次発掘調査概要」『琉球文化財調査報告書』1966年度
- 9、嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』1966年度
- 10、三島格「南島資料(1)」『古代文化』第23巻9・10号 1971年
- 11、註6文献に同じ
- 12、白木原和美「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』第23巻9・10号 1971年、および「類須恵器の出自について」『熊本大学法文論叢』第1号 1975年
- 13、安里進「グシク時代開始期の若干の問題について—久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から—」『沖縄県立博物館紀要』第1号 1975年
- 14、安里進「琉球—沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題⑤」『考古学研究』第34巻4号 1988、「沖縄の広底土器・亀焼系土器の編年について」『肥後考古』第8号（交流の考古学）1991年
- 15、南海日日新聞、大島新聞などの報道による
- 16、赤司善彦「朝鮮製無釉陶器の流入—高麗期を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』16 1991年
- 17、註6文献参照
- 18、註14文献参照
- 19、註4文献参照
- 20、註16文献参照
- 21、三辻利一「化学分析による土器の産地の推定」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』1989年などを参照
- 22、例えば、亀井明徳氏は14世紀以前における琉球列島への中国陶磁器の流入を、博多から薩摩を経由する貿易商人の活動によるものと考えられている。また、安里進氏は沖縄本島内でのグスクの類型化などを基に、琉球列島内部での成長過程を重視している。
亀井明徳「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号 1993年
安里進「考古学からみた琉球史」上 おきなわ文庫53 1990など
- 23、文献記録については、東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』1939年をはじめとした研究があり、考古学的資料の検討は、三島格『貝をめぐる考古学』1977年などにおいて行われている。
- 24、西谷正「高麗・朝鮮王朝と琉球の交流」『九州大学九州文化史研究施設紀要』第26号 1981年などを参照

陶器 生産技術로 본 濟州와 琉球

池田 榮史*

번역 오 성 규**

1. 머리말

古代日本에는 須惠器라고 하는靑灰色을 띠는 硬質陶器가 있었다. 須惠器의 원류는 原三國시대~三國시대의 한반도에서 생산된 陶質土器에서 찾을 수 있다(註1). 須惠器의 제작 기술은 古墳시대였던 5세기에 전해져, 이후 10세기까지 일본에서 祭器나 食器을 비롯해서 일상용기로서 널리 사용되었다.

더우기, 그 기술 전통은 일부의 中世陶器로 계승되어 일본 각지의 須惠器窯系 中世陶器로서 그 명맥을 유지했다는 것도 잘 알려져 있다(註2).

그런데, 현재 일본에 속해 있는 琉球列島는 17세기까지 사회적, 문화적으로 일본 본토와 전혀 다른 세계를 형성하고 있었다. 그래서, 도기생산 등에서 보면, 琉球列島와 일본의 古代, 中世의 관계는 매우 회박했으리라 생각되어 진다.

그러나, 최근의 考古學 조사로 중세 단계의 琉球列島에서, 須惠器의 계보를 따르는 것이라 생각되는 硬質陶器가 대규모로 생산되었음이 분명히 밝혀지고 있다. 그 뿐만 아니라, 이 硬質陶器는 일본 본토 須惠器가 아니고, 고려시대 無釉陶器와의 유사성도 지적되고 있어 고려시대의 한반도 및 제주도와 琉球列島와의 관계를 시야에 두고 생각 해 볼 필요가 있다(第1圖).

필자는 한반도와 琉球列島간의 물질 문화에 깊은 관심을 가지고 작년 본지에 그 개략을 서술했다(註3). 본론은 앞에 발표한 논문에 이어서 연구한 것으로 고려왕조시대에 병행하는 단계의 琉球列島에서 출토하는 硬質陶器에 초점을 두고 있다.

본 논문에서는 고려시대의 한반도 및 제주도와 琉球列島와의 연구 교류의 가능성에 대해서 개략적이거나 문제를 제기하고자 한다.

* 琉球大學教授 考古學 專攻.

** 琉球大學 碩士過程.

2. 연구사

琉球列島에서 일본본토의 須惠器를 닮은 硬質陶器를 燒成했던 가마가 발견되어 조사가 행해진 것은 1984(昭和59)년의 일이다. 琉球列島에서 약간 동북쪽에 위치하는 德之島 伊仙町 산중에서 溜池등 정비사업이 계획되어, 그 굴착공사를 하는 도중에 그 지역에 사는 연구자가 가마를 발견한 것이 계기가 되었다. 그리고, 발견후에 같은 해 10월부터 다음해 3월에 걸쳐서, 일부의 확인 및 본조사가 실시되었다(註4). 이 가마 발견 이전에 있어서도, 일본 본토에서 출토된 須惠器를 닮은 硬質陶器가 琉球列島 각지에서 출토된 사실은 이미 알려져 있으며, 이것들은 일본 본토와 같은「須惠器」(註5), 혹은「南島の須惠器」(註6)의 명칭으로 불려져 왔다. 1955년에서 57년에 걸쳐서 행해진 九學會連合 奄美大島 共同調査 委員會의 보고서에서, 國分直一, 河口貞徳氏 등은 이러한 硬質陶器에 주목해서 이것은 九州의 남쪽에서 제작되어, 일본 고대 국가의 南島經營 개시의 事情과 관련해서 南下 확산된 것으로 추측하고 있다(註7).

이에 반해 1960년대에 접어들어, 勝連城(註8)와 히니城(註9) 등 沖繩本島를 중심으로 한 구수쿠의 발굴 조사가 행해져, 硬質陶器가 많이 출토되어 알려지게 되었다. 그 결과, 硬質陶器들은 일본 본토에서 반입된 것이 아니라, 琉球列島내에서 생산된 가능성이 고려되기 시작했다. 그 중에서도, 硬質陶器가 본토(주로 南九州)의 須惠器와 전혀 닮지 않다고 크게 지적한 사람은 三島格氏이다(註10). 三島氏의 논고는 1966년에 발표된 것으로, 琉球列島 출토 硬質陶器의 특징을 근거로 窯跡이 당시의 琉球列島내에서 발견되지 않았다는 것을 전제로하여, 한반도에서의 將來品일 가능성을 지적하고 있다.

이러한 연구 상황에 커다란 畫期가 된 것은 1970년에 발표된 佐藤伸二氏의 논고이다(註11). 佐藤氏는 奄美諸島 출토의 須惠器를 닮은 硬質陶器를 「南島の須惠器」라고 부르고, 壺의 施文방법을 중심으로 4式으로 분류하여, 이를 단서로 해서 沖繩의 城시대 발전 과정을 3기로 구분했다. 그리고, 奄美에서 沖繩에 걸쳐서 출토되는「南島の須惠器」는 一系列의 변화로서 이해할 수 있으며, 그 燒成地가 沖繩를 포함하는 琉球列島의 어디인가 있었다고 결론 내리고 있다. 佐藤氏는 須惠器 燒成 기술의 南傳은 일본의 奈良·平安期에 본격화되는 大和政權의 南島經營과 관계되며, 이것이 먼저 南島北部地域에 정착해서 서서

히 南島的으로 변질해 가면서 남하했던 것과 혹은 遣唐使와 함께 전해진 것으로 보고 있다. 佐藤氏의 論考는 琉球列島 출토의 須惠器와 닳은 硬質陶器에 대한 型式분류와 편년을 시도했다는 점과, 이것을 근거로 해서 그 생산지를 沖繩을 포함한 南島내에서 찾았다는 점에서 종래의 연구를 크게 발전 시켰다.

이에 반해, 이들 琉球列島에서 출토된 硬質陶器를「類須惠器」라고 명명한 이가 白木原和美氏이다. 1971년과 1975년에 발표한 논고(註12)에서, 白木原氏는 일본 古墳文化의 지리적, 시간적 범위에 근거해서 생산된 본토의 須惠器와 琉球열도 출토의 須惠器와 닳은 硬質陶器라는 것이 그 역사적, 문화적 위치 설정이 본질적으로 다르다는 것을 지적했다. 그리고, 兩者의 관계가 명확하지 않은 한, 이것을 간단히 須惠器라고 부르는 것은 옳지 않다고 했다.

白木原氏 자신은 類須惠器의 원류와 산지를 한반도의 硬質陶器에서 찾고 있으며, 白木原氏의 命名과 문제 제기 이후, 「類須惠器」라는 명칭이 일반적으로 사용하게 되었다.

이어서, 1975년에 安里進氏에 의해 類須惠器 I·II類로 나눌 수 있음이 제기되었다(註13). 安里進氏는 佐藤氏의 분류와 연대적 위치 설정을 대략적으로 답습하면서, 壺의 口緣部형태와 만들기의 精粗를 근거로 한 분류와 편년을 시도하였다. 단, 類須惠器의 원류에 대해서는 언급하지 않았다. 또한, 安里氏는 카뮈야키窯跡群 발견 후 1987년과 1991년 앞의 분류를 발전시켜 壺를 대상으로 口緣部형태와 頸部の 굴곡 정도, 調整技法등의 精粗등에 의해 類須惠器를 4式으로 분류, 편년할 수 있다고 제시하고 있다(註14).

1984년의 카뮈야키가마의 발견과 조사는 이러한 연구 상황속에서 일어난 일로 커다란 관심을 모았다. 窯跡은 2支群으로 되어 있으며 제 I支群7基(그 중에 1기는 灰原 뿐 임), 제 II支群7基, 합계 14基가 확인되었고, 그 중에 제 I支群7基와 제 II支群1基가 조사 되어지고 있다. 그 결과, 類須惠器에는 종래 그 특징이라고 간주되었던 波狀과 平行沈線文을 새긴 壺뿐만 아니라, 甕·鉢·碗·注口製品 등도 있으며, 게다가 壺와 鉢는 각각 4종, 碗은 2종으로 나눌 수 있다는 것이 밝혀지게 되었다(第2圖). 또한, 제 I支群2·3號 窯와 제 II支群4·5·6號 窯에서 熱殘留磁氣 年代測定, 제 I支群 1號 窯와 제 II支群3·6號 窯에서 방사성탄소 연대측정을 한 결과, 전자는 12세기 중반에서 13세기 전반, 후자는 각각 $1050 \pm 45Y.BP$, $1140 \pm 55Y.BP$, $1210 \pm 130Y.BP$ 의 연대를 보여주고 있다. 그러나, 각 窯跡와 灰原에서 器種組成이 다르고, 더우기 器形과 제작기법

등에 의한 연대적 변화를 이끌어 내는 데까지는 이르지 못하고 있다. 다만, 길이가 짧고 平面形이 無花果狀을 보이는 가마의 구조에 대해서는 11~12세기 것이라고 생각되어지는 熊本縣 球磨郡 綿町 下り山窯跡群과의 유사점이 지적되어, 壺·甕·鉢를 주체로 하는 器種構成의 상태를 포함해서, 일본 중세 도기와 유사점을 크게 의식하게 되었다(第3圖). 또한, 카뮈야키窯跡群에 대해서는, 그 후 1996년부터 분포 확인조사가 진행되면서 1999년 여름 단계에서 IX支群까지 분포의 범위가 확인되고 있다(註15).

그런데, 이 카뮈야키窯跡群의 발견과 조사는 類須惠器연구에 일본 본토의 중세 도기와 유사점을 비교한다라는 방향성을 보여주었지만, 1991년에는 赤司善彦氏에 의해 여기에 새로운 문제를 제기하는 자료가 소개되었다. 그것은 大宰府와 鴻 館에서 출토된 高麗産 無釉陶器의 존재이다(註16). 赤司氏는 大宰府와 鴻 館에서 高麗産 無釉陶器의 출토에 주목함과 동시에, 이것과 類須惠器와의 유사성에 커다란 관심을 보였다. 그런 이유로, 일본 본토 중세 도기와 관계 해명에 결말을 내리려 하고 있던 類須惠器의 연구에 다시 한 번 한반도와의 관계를 고려하려는 기운이 고조되게 되었다. 그러나, 類須惠器는 한반도와 일본 본토에서 멀리 떨어진 琉球列島에서 출토되었기 때문에, 한국과 일본 본토의 연구자로부터 관심 끄는 면이 적어 高麗王朝를 비롯한 統一新羅王朝, 朝鮮王朝에 볼 수 있는 無釉陶器와의 관계에 대해서 구체적으로 검토하는 단계까지는 이르지 못하고 있다.

3. 類須惠器研究의 現狀

그러면, 이러한 상황에 있는 연구를 진행시키기 위해서는 먼저 비교 자료의 기본이 되는 類須惠器의 실태를 파악하는 것이 중요하다. 이것은 類須惠器의 生産遺跡과 消費遺跡 쌍방의 검토로부터 진행되어야 할 것이다. 생산유적은 德之島 카뮈야키窯跡群에 대해 그 지역 伊仙町 教育委員會에 의해서 확인 작업이 진행되고 있으며, 그 성과가 기대 되는 부분이 많다. 다음으로, 소비유적의 분포와 그 내용을 파악함에 있어서는, 琉球列島에 분포하는 각 출토 유적 자료의 확인을 확실히 진행해 나가는 방법 밖에는 없다. 또한, 이 두 과제를

해결하기 위해서는, 窯跡 출토 자료와 消費유적 출토 자료, 器種과 그 형태의 변화, 그리고 器種의 조성 등, 지금까지 알려진 자료에 대해서 型式學的 검토를 진행해야 할 필요가 있다.

그런데, 지금까지 類須惠器를 대상으로 했던 형식학적 연구를 되돌아 보면, 그 시초였던 佐藤氏는 壺의 施文기법을 단서로 해서 A, B로 2분류하고 있으며, 더우기 A類을 AⅠ, AⅡ, AⅢ으로 3분 하고 있다. A는 頸部에서 肩部에 걸쳐서 회전을 이용한 波狀文과 平行沈線이 새겨지는 것이고, B는 이것이 波狀文으로만 되는 것이다. AⅠ, AⅡ, AⅢ는 波狀文과 平行沈線을 새기는 방법에 차이가 있고, AⅠ式은 波狀文이나 平行沈線을 한 바퀴씩 정성스럽게 그려 넣는 것에 반해, AⅡ, AⅢ式은 波狀文·平行沈線을 소용돌이 모양으로 새겨 넣는다. 또한, 이런 경우에 AⅡ式에서는 平行沈線과 波狀文이 겹침이 없이 정연하게 새겨짐에 비해, AⅢ式에서는 平行沈線을 波狀文이 자르고 있는 약간 조잡하게 새겨져 있다. 佐藤氏는 이러한 차이점을 시간적 추이의 반영으로 보고 施文이 정성스럽게 된 AⅠ式에서 AⅡ, AⅢ式 거쳐, 平行沈線이 생략된 B式으로 변화한 것으로 생각하고 있다. 그리고, AⅠ式에서 BⅡ式에의 변화 과정에서, 口緣部 제작의 조잡화와 두드러져 완성시키는 기술의 퇴화도 보인다고 지적하고 있다. 게다가, 佐藤氏는 이들 연대에 대해서 일본 본토에서는 平安末期에서 鎌倉初期를 중심으로 이용한 滑石製 石鍋가 AⅡ式이후의 須惠器를 동반하는 것을 근거로 그 상한을 12세기 후반에 두고, 이것에 선행하는 AⅠ式에 대해서는 명확히 말하지 않은 채 8세기에 가까운 단계, 쇠퇴에 대해서는 13세기 후반에서 14세기를 가정하고 있다(註17).

한편, 安里氏가 類須惠器를 4분류한 것은 大·中型 壺의 口緣部 형태의 변화를 중심으로 頸部の 굴곡도, 肩部의 팽창 정도 등을 고려해서, I式, II式, III式, IV式古, IV式新으로 분류하고 있다. 각각 분류 개념을 요약하면, 다음과 같다.

I式 口緣端部가 둥글고 그 밑에 突帶가 붙어 있다.

頸部는 크게 바깥으로 꺾여져있고, 肩部는 매끄럽게 빗어 내려 있으며 無文이다.

II式 突帶의 위치가 口緣部에 접근해 있고, 肥厚한 口緣을 이룬다.

(突帶의 형상이 남아있고, 肥厚部 端面下端이 돌출하고, 그 上面에는 凹面이 있다.)

頸部の 굴곡은 여전히 심하고, 波狀沈線이 새겨져 있다.

Ⅲ式 突帶의 흔적이 없는 肥厚口緣으로, 肥口厚口緣端部는 평탄면 또는 凸面을 이룬다.

頸部의 굴곡이 적어지고, 肩部의 팽창이 현저하게 나타나기 시작한다.

Ⅳ式古 口緣端部가 두껍지 않고 단순화 된다.

口緣 端部는 둥글게 되어 지는가 평탄해지며, 평탄할 경우는 內傾, 水平, 外傾이 있다.

頸部는 直立하고, 肩의 팽창은 크다.

퇴화된 波狀沈線이 새겨지든지 무문이다.

두드러서 완성시키는 것은 약간 두껍게 되고, 내면의 점토 연결 흔적이 제거되지 않고 남는다.

Ⅳ式新 Ⅳ式古에 비교해 頸部의 굴곡이 적고, 口緣部 단면은 外傾하지 않는다. 安里氏 분류의 Ⅱ式은 佐藤氏 분류의 A式, Ⅲ式은 B式, Ⅳ式은 波狀沈線이 위축된 B式에 해당한다(第4圖). 이러한 연대 설정에 대해서, 安里氏는 토기와 滑石製石鍋 등의 반출 유물과의 조성도 고려하면서, Ⅰ式은 11세기, Ⅱ와 Ⅲ式은 12세기, Ⅳ式古는 13세기 전반, Ⅳ式新은 13세기 후반에서 14세기 전반의 연대를 대응시키고 있다. 그 위에, 각 型式이 消費遺跡 뿐만 아니라, 카뮈야키 窯跡에서도 병존해 가면서 변천하고 있음을 지적하고 있으며, 기계적인 형식 편년에서 병존 기간을 고려한 형식 변천을 분명하게 할 필요성이 언급되고 있다(註18).

4. 類須惠器의 製作 技法

그런데, 佐藤·安里兩氏의 분류와 편년은 壺를 대상으로 하고 있고 그 밖의 지종은 다루지 않고 있다. 이것은 소비유적, 카뮈야키 窯跡 들 다에서 壺의 출토례가 많은 것에 기인하고 있지만, 이렇게 하면 口緣部 주변을 남긴 壺 이외의 자료에서는 類須惠器의 분류·편년을 포함시킨 검토가 가능하지 않다. 그래서, 다시 한번 생산유적인 카뮈야키 窯跡群의 출토 자료를 확인해 보면, 앞에서 말한 것 처럼, 壺는 A, B, C, D의 4종류, 鉢는 大鉢, 鉢型, 小鉢, 摺鉢의 4종류, 碗은 丸緣과 玉緣의 2종류가 있고, 여기에 甕와 注口제품 등을 볼 수 있다(註19).

게다가, 제작 기법에 있어서는 지금까지의 연구에서 두드리는 것 등 일부의 기법이 검토의 대상이 되고 있으며, 底部를 만드는 것에서 粘土紐(帶) 말아 올리는 成形, 두드리기, 누르기, 빗질하기, 각기에 의한 정형 등, 일련의 제작 과정에 대한 복원을 포함한 검토는 행해지고 있지 않다. 일본의 須惠器와 中世陶器의 연구에서는 이러한 제작 과정이나 제작기술에 대해서 분석을 포함시킨 型式學적 연구를 일반적으로 행하고 있고, 琉球列島에서 출토되는 須惠器에 대해서도 이러한 면에서 연구되어야 한다고 생각된다.

그래서, 類須惠器의 제작 기법을 지금까지 필자가 實見한 범위에서 복원해 보면, 甕·壺·鉢를 주로 한 제품에는 공통적인 제작 과정과 기법이 관찰된다. 다시 말해서, 그 제작함에 있어서 우선 轆轤(回轉臺) 위에 粘土塊를 두고, 이것을 두드리면서 넓고 얇은 粘土板을 만들나서, 회전을 이용해서 둥근 底部를 만들어 낸다. 다음으로는 만들어진 周緣部에 粘土紐를 말아 올려 胴部를 만든다. 이때, 粘土紐의 접합은 손가락으로 하고, 그 후에 器內面에 押壓具를 두고, 器外面부터는 打壓具를 사용해서, 두드리면서 만들어 낸다. 그 다음에 轆轤 회전을 이용해서, 底部에서 胴部에 걸쳐서 내면에 篋狀 또는 板狀공구로 거칠게 쓸면서 조정하여 두드릴 때의 押壓具의 흔적을 지운다. 그릇 외면에 대해서도 빗질로 조정을 하지만 打壓痕을 남기는 경우가 많다. 胴部 成形後, 그 上端에 粘土紐를 손으로 추가 접합하고, 口緣部를 만든다. 口緣部는 역시 轆轤 회전을 이용한 빗질 조정을 하고, 底部와 胴部の 접합 부분도 약간 두껍게 만들어진 器壁을 轆轤 회전을 이용한 주걱 각기로 얇게 완성시킨다. 口緣部를 제외하고는, 전체의 마무리가 거칠며, 粘土紐의 접합흔이나 두드리기의 성형 흔적, 轆轤회전을 이용한 정형 흔적을 분명하게 관찰할 수 있는 특징이 나타난다. 또한, 底部의 두께는 法量에 관계없이 3~5밀리 정도의 것이 많고, 器壁도 기본적으로 얇다. 燒成은 단단하게 구워져 검은 색이 칠해진 靑灰色을 띠는 것이 대부분이다.

이들 제작 기법에는 일본 중세 도기와와의 공통성도 보이지만, 底部와 胴部를 얇게 만드는 기법이라든지, 胴部 粘土紐의 감아 올린 흔적과 두드리기와 빗질로 조정된 흔적이 명료하게 관찰되는 점 등에서는 분명한 개성을 나타낸다. 이 개성들 중에서, 胴部를 얇게 만드는 것과 粘土紐의 말아 올린 흔적 및 마무리의 빗질 조정흔적이 명료하게 관찰되는 점 등은, 赤司氏가 大宰府와 鴻館 출토의 高麗産 無釉陶器를 관찰했을 때 지적했던 특징과 공통되고 있다(註20).

필자 역시 大宰府와 鴻 館에서 출토된 高麗産 無釉陶器 자료와, 琉球列島에서 출토된 類須惠器 자료를 동시에 배열해서 관찰할 기회를 가졌지만, 자료 속에는 그 식별을 힘들게 할 정도의 흡사한 자료도 있어, 양자를 상세히 비교 검토할 필요성을 절실히 느꼈다. 이러한 점에서 한국 연구자의 類須惠器에 대한 관심이 높아지길 바라고 있다. 또한, 근년 須惠器연구에서는 螢光X線 分析法 등에 의해 생산지를 과학적으로 특정시키는 작업도 진행되고 있고(註21), 카뮈야키窯跡群의 자료나 소비유적 출토 자료에도 이들 과학적 방법을 적용하는 것이 필요할 것이다.

5. 맺음말: 類須惠器 연구와 濟州島

이상, 간단하게 琉球列島에서 보이는 類須惠器라는 硬質陶器에 대해서 현재의 연구 상황을 소개했다. 이 硬質陶器의 생산은 적어도 11세기에 시작되어 14세기까지 존속되었다고 생각된다. 대충 300년에 이르는 발자취에 압도되는 마음을 금할 수 없지만, 그 생산에는 흙 반죽에서 그릇의 제작, 가마의 축조, 연료의 확보, 제품 소성에 이르기 까지 숙련된 기술이 필요한 것은 말할 필요도 없다. 이러한 점에 있어서, 현재까지의 고고학적 조사 성과를 근거로 해서 11세기경의 琉球列島의 사회적, 문화적 상황으로 보면, 德之島에서의 類須惠器 제작 기술의 자생적 성립은 생각하기 어렵고, 島外에서의 기술 도입을 생각하지 않을 수 없다. 이에 대해서 이미 서술한 것 처럼, 器種 구성의 유사성에 있어서는 일본 중세 도기, 제작 기술과 형태의 유사성에 있어서는 高麗産 無釉陶器를 주로 한반도 제작 기술과의 관계가 상기되는 바이다. 類須惠器의 型式學的 연구가 확립되지 않은 상황에서 이것의 是非를 간단히 이야기 하는 것은 가능하지 않지만, 중요한 것은 11세기 단계의 德之島에서 類須惠器가 생산되었다는 점이다. 즉, 類須惠器의 생산에 있어서는 제작 기술을 가진 집단이 德之島에 이동하지 않으면 안되었지만, 이동함에 있어서는 이것을 기획, 실행할 집단과 조직이 존재 했으리라 추측된다. 이러한 것은 類須惠器의 琉球列島 전역에 이르는 분포와도 관계되는 것으로, 여기에 類須惠器를 운반하는 해운, 항해 기술과 集配體制를 가진 집단과 조직의 존재가 불가결하다.

그럼, 이 類須惠器의 생산과 유통을 담당한 것은 어떠한 집단과 조직이었을까. 이것은 당시 琉球列島내에서 그 존재를 찾으려는 생각과, 외부로부터의 움직임을 평가하려는 생각이 있다(註22). 이러한 경우, 琉球列島내의 집단과 조직의 존재를 중시하면, 農耕의 도입 등으로 琉球列島에 있어서 도기의 수요가 많아지고, 기술 도입을 도모했던 것으로 생각된다. 또한 외부로부터의 움직임에 중점을 두면, 類須惠器의 분포 지역인 琉球列島를 염두에 두고 德之島에 카뮈야키가마를 구축해서, 그 유통을 관리한 집단과 조직이 존재했던 것이 된다.

현재로는 어느 쪽으로도 결론 내리기는 어렵지만, 琉球列島에서 九州, 경우에 따라서는 한반도까지 시야에 두고 활동을 했던 집단과 조직이 11세기 단계에 존재했다는 것은 확실하다.

한반도와 琉球列島와의 교류를 둘러싼 지금까지의 연구에 의하면, 한반도 三國時代의 古墳에서는 琉球列島에서 채집되는 커다란 조개를 이용해 만든 馬具와 貝匙 등이 출토된 것이 알려져 있다. 또한, 朝鮮時代의 문헌에는 琉球王族이 망명했다는 기록과, 漂着했던 朝鮮漁民이 琉球國으로 부터 송환되었던 기록 등이 남아있다(註23). 여기에 대해서, 琉球列島에서는 高麗瓦라고 불리는 한반도의 造瓦기술로 만들었다고 생각되어지는 瓦類와 高麗靑磁가 14~16세기의 유적에서 출토되는 것을 비롯해, 高麗版 大藏經을 보관했던 건조물의 전승이 남아 있는 것 등, 고려왕조 이후의 한반도와의 관계를 보여주는 자료가 많이 제시되고 있다(註24). 이러한 사실들을 통해서 보면, 한반도와 琉球列島와의 관계는 문헌기록에 나타나는 14세기 이후 뿐만아니라 그 이전에도 존재했다는 것이 분명하다. 그 관계가 어떠한 내용, 실태를 지니고 있는가를 검증한 후에 琉球列島에서 볼 수 있는 類須惠器는 하나의 실마리를 제시하는 것이라고 생각된다. 그러나, 類須惠器의 비교 대상이 되는 高麗産 無釉陶器와 朝鮮王朝期の 無釉陶器에 대한 연구는 한국에 있어서 그렇게 활발하지 않은 것으로 생각된다. 이에 대해서는, 濟州島는 三別抄에 의한 蒙古 저항활동과 元王朝에 의한 濟州牧의 설치 등, 고려시대를 통해서 역사 변동의 무대가 되었던 점 때문에, 이와 관련된 연대가 분명한 유적이거나 유물을 한정시킬 수 있는 가능성이 높은 것으로 생각된다. 다시 말해서, 제주도에서의 고려시대에 대한 고고학적 연구, 특히 일상 용기로서의 無釉陶器 연구의 진행은 琉球列島의 역사 전개를 밝히는 데에 커다란 영향을 미칠 것이다. 그러므로, 琉球列島의 역사 연구에 있어서 濟州島 고고학 연구의 동향으로부터 눈을 떼지 못할 것이다.

謝 辭

이 발표를 할 수 있도록 제주대학교 탐라문화연구소 고창석교수님, 제주대학교 박물관 관장 유철인교수님, 그리고 박물관 학예 연구원 강창화선생님, 또한 제주대학교 인문대학 김동전교수님께서 여러 면으로 배려해 주셨습니다. 또한 본문을 한국어로 번역함에 있어서는 제주대학교 졸업생 유구대학 대학원 인문사회학과 대학원생 오성규씨의 손을 빌려드립니다. 글로써나마, 감사의 마음을 전합니다.

註

1. 口隆康「須惠器」『世界陶磁全集』1-日本古代 1958年 참조
2. 檜崎彰一「古代・中世窯業の技術の發展と展開」『日本の考古學』VI歴史時代上 1967年 참조
3. 拙稿「물질 문화 자료로 본 韓國 濟州道와 琉球列島の 교류」『탐라문화』第19號 1988년
4. 伊仙町教育委員會「カムイヤキ窯古窯跡群Ⅰ・Ⅱ」『伊仙町埋藏文化財發掘調査報告書』(3)・(5)1985年
5. 九學會連合奄美大島共同調査委員會編『奄美-自然と文化-』論文編 1959
6. 佐藤伸二「南島の須惠器」『東洋文化』48・49 1970
7. 註5 文獻 P. 244
8. 琉球政府文化財保護委員會「勝連城跡第一次發掘調査概要」『琉球文化財調査報告書』1965年度, 그리고 同「勝連城第二次發掘調査概要」『琉球文化財調査報告書』1966年度
9. 嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』1966年度
10. 三島格「南島資料(1)」『古代文化』第23卷9・10號 1971年
11. 註6 문헌과 같다.
12. 白木原和美「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』第23卷9・10號 1971年 및 「類 須惠器の出自について」『熊本大學法文論叢』第1號 1975年
13. 安里進「グスク時代開始期の若干の問題について-久米島ヤジャ-ガマ遺跡の調査から-」『沖繩縣立博物館紀要』第1號 1975年
14. 安里進「琉球-沖繩の考古學的時代區分をめぐる諸問題下」『考古學研究』第34

陶器 生産技術로 본 濟州와 琉球

- 卷 號 1988, 「沖繩の廣底土器・龜燒系土器の編年について」『肥後考古』第8號(交流の考古學)1991年
15. 南海日日新聞, 大島新聞 등이 보도한 내용
 16. 赤司善彦「朝鮮製無釉陶器の流入-高麗期を中心として-」『九州歴史資料館研究論集』16 1991年
 17. 註6 文獻 參照
 18. 註14 文獻 參照
 19. 註4 文獻 參照
 20. 註16 文獻 參照
 21. 三江利一「化學分析による土器の産地の推定」『新しい研究法は考古學になにをもたらしたか』1989年 參照
 22. 예를 들어 龜井明德氏は 14세기 이전에 琉球列島에의 中國陶磁器의 유입을 博多로 부터 薩摩를 경유하는 무역 상인의 활동에 의한 것으로 생각하고 있다. 또한 安里進는 沖繩 본토내에서의 구수쿠의 유형화 등을 근거로 해서, 琉球列島 내부에서의 성장 과정을 증시한다. 龜井明德「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア學』第 11號 1993年 安里進『考古學からみた琉球史』上 おきなわ文庫53 1990年
 23. 문헌기록에 대해서, 東恩納寛惇『黎明期の海外交通史』1939年을 시작으로 한 연구가 있고, 고고학적 자료의 검토는 三島格『貝をめぐる考古學』1977年에서 행해 지고 있다.
 24. 西谷正「高麗・朝鮮王朝と琉球の交流」『九州大學九州文化史研究施設紀要』第26號 1981年 參照